

【第4分科会】提案（B）

学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」の実現

[助言者]	広島県西部教育事務所	所長	太田 耕樹
[発表者]	呉市阿賀中学校	校長	大里 康暁
[司会者]	呉市安浦中学校	校長	田中 眞樹
[運営委員]	竹原市竹原中学校	校長	吉本 康隆
[記録者]	豊田郡大崎上島中学校	校長	笠原 美智恵

1 はじめに

阿賀地区は、呉市南部に位置し、海に面している。交通の要衝で、北は東広島呉自動車道で東広島市と、西は休山新道（トンネル）、JR呉線で呉市中心部とつながる。そして、南には、瀬戸内航路と山陽自動車道を結ぶ臨海事業用地・港湾関連用地である阿賀マリノポリスがある。

阿賀小学校との1小1中で、小中一貫教育の推進を図っている。JRの線路の南側には、本校を含め多くの学校が集まっており、地域の文化拠点・交流拠点となる阿賀まちづくりセンターも近接している。これに自治会やスポーツ協会等が加わり、「アガデミア（阿賀学園地域教育連携協議会）」と呼ぶ地域連携組織を構成している。他に、青少年健全育成会議など地域で阿賀の子供たちを育てていこうという気持ちは強い。また、地域・保護者には卒業生も多く、学校の教育活動に協力的である。

地域は、宮島管弦祭の管弦船（御座船）を曳航することに誇りをもっているが、歴史・文化についての地域での継承は困難な状況にある。



漕船祭幟旗

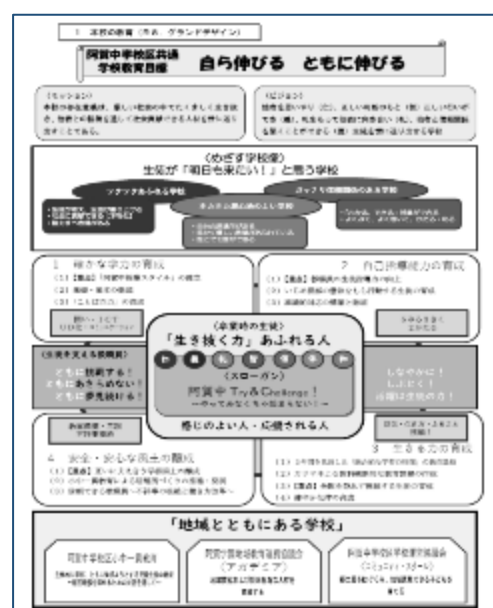
2 学校経営方針

（1）学校教育目標

阿賀中学校区では、「自ら伸びる ともに伸びる」を学校教育目標としている。自己の成長への意欲をもち、仲間と協働して前進する生徒の育成を阿賀小学校とともに「居場所づくり」を掲げて取り組んでいる。これを受け、本校では「阿賀中 Try & Challenge! ～やってみなくちゃ始まらない～」をスローガンに、失敗を恐れず、挑戦し続けることで、それぞれが成長する、活気のある学校づくりに取り組んでいる。

（2）目指す生徒像

本校は、生徒数235名、学級数9学級（特別支援学級2学級を含む）の中規模校である。ピーク時（昭



令和8年度グランドデザイン

和 37 年)には、生徒数 1174 名であったが、年々減少している。令和 5 年度 9 学級だった通常学級は今年度 7 学級となり、教職員定数の減少も急激に進んでいる。

明るく人懐こい生徒が多く、落ち着いて授業を受け、楽しく学校生活を送っている。正門での一礼が伝統となっており、礼儀やマナーを身に付けている生徒も多い。多くの生徒は、優しく、穏やかである。行事に主体的に全力で取り組み、体育大会での学年を超えた本気の姿、合唱での素晴らしい歌声で毎年会場が感動に包まれる。一方、たくましさやしぶとさに欠けることが課題である。打たれ弱く、回復力に乏しい生徒が多く、不登校、自傷行為につながっている。令和 7・8 年度は、不登校 S S R 推進校である。

3 着任時の学校経営目標実現に向けた課題

令和 6 年度に本校に着任し、学校経営を行う中で、次の 4 点の課題が見えてきた。

(1) 校長の考えを周知できる場が確保できていない。

当初、企画会所属の人数が多すぎ、授業時間に位置付けることができなかった。そのため、放課後開催であったが、全員がそろわず、実施を見送ることが続いた。校長の方針を浸透させ、学校を実動させていく企画会がもてないことに危機感を覚えた。

(2) 管理職、各主任・主事等の役割が明確でない。

基本的な役割は決まっているが、新たなことに挑戦する場合の役割は明確ではなかった。挑戦を実行するには、役割を明確にすることが必要だった。

(3) 学校経営方針に沿った外部機関との連携が十分でない。

他の地域にはない連携基盤があるが、連携内容は毎年同じで定型だと感じた。阿賀中学校としてやりたいことを、ともに進めていくような柔軟な連携をしたいと考えた。

(4) 目指す生徒像を具体的なイメージとして共有できていない。

やったことのない挑戦は、教職員にとって不安が大きい。校長が旗を振っても、尻込みしてしまいがちである。その取組のよさや生徒の具体的な姿が共有できていないことは推進のブレーキとなった。

4 校内での取組 ～挑戦する学校づくり～

挑戦する生徒を育成するには、生徒の挑戦意欲をかき立てる活動の設定が必要である。そのキーワードを、「生徒による企画・運営」「本物」とし、令和 7 年度に学校としての“挑戦”を開始した。その対象は、体育大会をはじめとする行事、総合的な学習の時間である。

「生徒による企画・運営」をゴールまで導くには、一人の教職員の力だけに頼らず、組織で取り組むことが必要である。そこで、開催困難な従来の企画会は解体し、役割を明確化しながら、組織を再編した。人数を絞った企画会で体育大会・文化発表会を検討、新設の学年主任会で総合的な学習の時間の教育課程の見直しを行うこととした。「生徒による企画・運営」に対して、尻込みする教職員の存在や働き方改革との兼ね合いなど困難はあったが、各会での協議を通して、核となる教職員を一枚岩にすることで取組を継続できた。

最初の生徒主体の行事への挑戦は令和 7 年 5 月実施の体育大会だった。3 年生が協議を重ね、実施種目、プログラム編成を決定し、練習で後輩を指導する、文字通り、生徒がゼロから創り上げる体育大会である。この構想を発表した際、ゴールイメージがないため生徒・教職員とも混乱した。しかし、体育主任（生徒指導主事）が管理職・主任主事とつながり、リ

ーダーシップを発揮することで結果的に大きな成功を収めることができた。教職員は挑戦を通して、生徒とともに大きな喜怒哀楽を経験した。これが、教職員としての感動ややりがいを生み、成功体験となって、「生徒による企画・運営」のよさとねらいが定着した。校長の学校経営方針を身をもって理解し、令和7年度の方向性を真に理解する契機となった。そして、体育大会で行事運営について学んだ3年生は大きな成長を遂げ、これ以降、自信をもって様々な行事に挑戦した。一つ一つの行事での生徒の成長を通して、挑戦と失敗の価値が教職員の中で大きくなっていったことが実感できた。

また、「本物」にするには、学校外の力の活用が欠かせず、地域連携のあり方について見直しを迫られた。例えば、アガデミアの定例の行事は、本校の新たな挑戦には直接は関連がない。そのため、昨年度は校長発案でアガデミアの所属団体に個別に協力を依頼した。その協力による効果は高く、教職員には地域がともに生徒を育てる仲間であることが意識づけられた。特に、防災フェスタでは、地域との連携・協働があったからこそ本物化し、生徒だけでなく地域の方々にとっても手ごたえを感じるものとなった。

5 3つの地域連携の概要

本校には、3つの地域連携の柱がある。阿賀中学校以外の地域の学校や団体とともに協働し、阿賀地区で生きる子どもたちの健全な育成に、チームで取り組んでいる。

3本柱の概要は、次のとおりである。

(1) アガデミア（阿賀学園地域教育連携協議会）

平成18年12月23日、地域貢献及び将来有為な人材の育成を目的として設立された。阿賀地域の学校等を中心にして、13団体（学校7校、地域6団体）で構成されている。年に6回程度開催されるアガデミア協議会での協議に基づき、クリーンアップ・ザ・AG A、アガデミア文化発表会、地域合同津波避難訓練を通して連携を深めている。また、個別の連携を積極的に実施している。

(2) 阿賀中学校区コミュニティスクール

令和7年度に発足した。初年度は、学校運営協議会での協議で課題を明確にし、運営方針を定めていった。

(3) 阿賀中学校区小中一貫教育

呉市全中学校区で、平成19年度に「中一ギャップの解消」「自尊感情の向上」を目的に、全国に先駆け小中一貫教育が導入された。

阿賀中学校区は、分離型で阿賀小学校と小中一貫教育を推進している。令和4年度から「居場所づくり」をキーワードに研究を進め、生徒理解力・生徒指導力を磨くことで、生徒の人間関係構築力を向上させることに取り組んでいる。

また、運営委員会での協議によって、小中合同活動、小中合同研修会・授業研究会、乗入れ授業等に取り組んでいる。



小学校での合唱披露

6 3つの地域連携を生かした学校の取組

(1) 阿賀中学校区コミュニティスクール（以下、CS）の立ち上げ

令和7年度から呉市立全校にCSが導入された。本校は、阿賀小学校とともに阿賀中学

校区CSを運営している。令和7年度は方向性を定める1年間だったが、助言、参観、物的支援など教育活動の充実のための支援を早速多くいただいた。しかし、委員は「手伝う」という意識であり、支援は学校運営協議会委員に限定されていた。そして、委員にとっては「これがCSだ」という認識だった。これを好機として、目的や組織の枠組みなどCSのあり方について校長として課題を整理した。その課題を教頭と共有し、校長は全体統括、教頭は実動という役割を明確にし、次回への準備を進めた。両校校長で議題、内容を詰めたうえで、本校教頭と小学校の主幹教諭、会長・副会長による事前の打合せをさせた。

12月に実施した第3回学校運営協議会では、第1・2回と比べ、事前打合せにより会の方向性が明確だったことで、議論が活発になり、より学校の教育活動を踏まえた会となった。また、CSの大枠として、郷土愛と地域貢献をキーワードとすること、学校運営協議会の役割を企画・運営とすることを確認した。

防災フェスタに関する協議で出された「阿賀地域に特化した防災フェスタにする」という提案はこの行事の目的を理解したもので、大変心強く感じた。今年度、この提案をもとに、地域と強く結びついた防災フェスタにワクワクしながら取り組んでいる。

(2) 総合的な学習の時間の再編 ～その取組と防災フェスタの実施～

大きな企画会を廃止後、機能を分化・特化して、企画会、学年主任会、特別支援会議、衛生不祥事防止委員会として再編した。全教職員がいずれかの組織に所属し、定期開催を実現した。苦肉の策であったが、主任・主事の役割・責任が明確になり、組織の中での一人一役が実現することで、教職員の学校運営への参画意識を向上させることができた。

その中で、学年主任会では総合的な学習の時間について、3年間で3本柱で貫き、学習のつながりをもたせるよう見直した。その柱の一つが「防災学習」である。

3学年は昨年度、防災学習の最終的なまとめとして、「防災フェスタ」に挑戦した。これは、3学年教職員の強い希望で実施したもので、防災学習での学びを生かした地域貢献を目指した。この実施に当たり、7月に学校運営協議会委員を招き、3年生が企画のプレゼンを行った。それぞれの委員から専門的な視点での意見をいただき、生徒にとって企画を練り直すよい機会になるとともに、委員にとっても生徒の成長に資する実感のもてる取組となった。また、令和7年11月21日に実施した防災フェスタには、CS・アカデミアのつながりで、阿賀保育園、阿賀小学校、呉南特別支援学校から園児児童生徒の参加があった。呉高等学校からも、探究的な学びの時間に防災グループに所属する生徒が助言者の立場で参加した。帰校後、「自分たちもやりたい!」という言葉があったと聞いた。新たな協働による防災フェスタの可能性を考えている。この行事は、来場者がいることで成り立つ。児童生徒に加え、保護者・地域からも多くの来場者を得て実施した。3年生が、積極的に来場者をもてなす姿は、成長を感じさせた。地域とのつながりで生徒の活動がより充実した。アカデミアやCS等のおかげであり、校長だよりで感謝の思いを生徒・教職員と共有した。



園児とボウサイジャー



防災シンポジウム

(3) 阿賀中ソーラン ～小中一貫の取組について～

阿賀中ソーランは、本校生徒の誇りである。最大の特徴は、地域の歴史や文化を題材にした 20 以上のオリジナルソーランがあることである。地域の歴史や文化が忘れられようとしている今、文化継承として阿賀中ソーランへの期待は大きい。今年度は第 26 代となり長い歴史を積み重ねてきている。



小学生へソーラン講習会

長く継続できている背景に、小中一貫教育での取組がある。小学校の運動会に本校 1 年生が行き、阿賀中ソーランを披露する。小学校を卒業したばかりの生徒だが、誇りをもって披露する姿は頼もしい。さらに、同じく 1 年生が 11 月に、小学 6 年生にソーラン講習会を実施する。昨年、学年主任会で協議を重ね、1 年生は「6 年生にどう教えれば、意欲的にソーランを習得できるか」というテーマで取り組んだ。講習会では、小学生を本気で取り組ませることができ、1 年生は小学校の児童・先生から直接感謝の言葉をいただいた。とても喜び、満足する 1 年生の姿が印象的だった。小学生は、ここで学んだ阿賀中ソーランを 12 月に行われるアガデミア文化発表会で地域の方々に披露する。令和 7 年は、例年以上の 20 名もの児童が有志として参加した。希望者が多かったのも、ソーラン講習会の成果と考える。そして、同じ場で本校伝統芸能部も発表を行った。その迫力ある演技を間近で見て、小学生は憧れを抱き、継承の決意を強くしていた。この取組サイクルを経て入学してきた生徒は、体育大会で中学生として阿賀中ソーランに挑戦する。

しかし、継承の中心である伝統芸能部の活動は停滞していた。地元・近隣の祭りに参加するなど、地域活性化の一翼を担っているが、参加者を募るのにも苦勞する状況が続いていた。顧問と協議し、運動部との兼部容認が原因と考え、校長として兼部の廃止を決定した。それを校長から生徒・保護者に丁寧に伝え、理解を得た。最終的には、文化部のみ兼部可とし、本気で伝統芸能部の活動に取り組む体制を整えた。その結果、毎回全部員での練習ができるようになり、阿賀中ソーランを中心となり手本として牽引している。

(4) アガデミア津波避難訓練の実施

アガデミアでは毎年、阿賀地域全体で同一日に津波避難訓練を実施している。阿賀地域は埋立地が広く、海も川も間近に迫る。本校は、液状化するとともにされている。災害への脆弱性がある阿賀地域にとって津波避難訓練は大切である。アガデミアでの危機意識は強く、毎回のよう課題克服に向けた協議がなされており、防災を専門とする呉工業高等専門学校環境都市工学分野 河村進一教授にも貴重な助言をいただいている。すべてのアガデミアの学校は埋立地である J R 線路の南側にあり、北側への避難経路の確保が最大の課題である。

この協議を教職員にも話し、課題意識を共有している。防災担当と協議し、通常の避難経路を利用できない場合を想定した避難訓練を行った。そして現在、防災フェスタでこの避難訓練を真に実践的なものにする提案をしたいと教職員が模索している。呉市危機管理課との連携で、避難訓練での地域貢献についての示唆が契機だと聞いた。行事を行うに際し、前年踏襲ではなく、目的に迫る挑戦をする姿勢をたいへんうれしく、頼もしく思う。

7 成果と課題

- 学校の取組のポイントである「本物化」の実現に向けた地域連携を進めることができた。
- 教職員発の挑戦（防災フェスタ）を実現することができた。
- 生徒の成長を確かに感じることで、業務の中での充実感を感じる者が増えた。
- 管理職・教職員・地域等の役割を明確にすることで、「チーム化」を進められた。
- ▼保護者・地域からの信頼が向上したが、教職員のゆとりが不足することとなった。
- ▼地域の協力に関する広報が不十分であるため、地域全体を盛り上げられていない。
- ▼教職員発の地域連携が当たり前となるよう地域理解を進めることが必要である。

〈業務改善アンケート〉

児童生徒と向き合う時間が確保できている	R6	77.8%	R7	85.7%
日々の業務の中で、充実感を得られている	R6	81.0%	R7	88.2%
業務の進捗状況が把握され、必要に応じて業務分担の見直しや進捗調整等がなされている	R6	61.9%	R7	94.1%

自分の住んでいる地域のこと好きです（広島県学習意識等）

	R5	87.8%	R6	89.3%	R7	88.8%
地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか（全国学力）	R5	68.8%	R6	83.5%	R7	77.6%
不登校生徒数	R5	28名	R6	22名	R7	22名

8 おわりに

本稿で挙げた学校経営上の4つの課題の解消が、成果につながったと考えている。3（1）は「各種会議等の分化」、（2）は「各種会議等の役割の特化」、（3）は「可能な限りのGive & Take」、（4）は「とにかく実際にやってみる、ゴールを経験する」で対応した。ここまでを振り返り、校長として組織編制の大切さを実感している。組織編制の工夫により、学校経営方針の浸透、主任・主事等の人材育成を図ることができた。これにより、多少強引ではあったが、行事を最後までやりきることができた。行事等の取組を通して、生徒・教職員・家庭・地域がチームになれたと感じている。

阿賀地区には多くの学校があり、それぞれの学校経営がある。それを理解し、尊重することが阿賀地区での地域連携・協働の礎となる。そのために、「チーム阿賀中」から「チーム阿賀」へと発想を転換した。各校とも、阿賀中学校にとって大切な教育資産である。それを活用可能なものにしていくために、校長として肝心なところで各校の協力を得られるように、信頼関係を築くことを第一にこまめに動くようにした。今後、現在の関係をより発展させ、持続可能なものとするためには、現状のGive & TakeからWinWinへの転換が必要である。そのために、特色、ニーズ、教育内容など、お互いにさらに理解を深めていきたい。

一方、課題で挙げたように、教員の情熱に頼ってしまった部分は大きく、感謝とともに大きな課題と受け止めている。様々な取組は、適切に時間をかければ、かけた分だけ成果となって返ってくる。しかし、初めての取組も多く、想定以上に時間も手間もかかった。それでも、業務改善アンケート結果が向上したのは、地域との連携による“本物化”、そして教員が思っていた以上の生徒の成長によって、やりがいが生まれたのだと考える。令和7年度3学期に教育効果と働き方改革の両立をポイントに企画会・学年主任会で取組を見直した。ゆとりや余白をつくることで、新たな発想や意欲につなげていきたい。